



(NO FENCE IN NORTH KOREA)

NO FENCE

E-mail: nf-staff@netlive.ne.jp

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」
会報 かいほう / ノーフェンス

NO FENCE

やさしい気持ち、人の
痛みを感じる気持ち、
誰もが本来持っている
そういうものとわたし
たちは出会いたい。

vol **8**

2010年5月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> 【郵便振替口座】 NO FENCE / 00180-1-707147



INDEX

●NO FENCE 最近の活動	2
●北朝鮮のキリスト教信者たちは今	3
●黄長燁(ファン・ジャンヨブ)氏の講演	砂川昌順 4
●[基礎知識]〈7〉先軍政治の意味	小川晴久 6
●国会議員へのポスティングを通じて	渡邊裕馬 7
●「…だから」と「こそ」	小沢木理 8
●北で耀徳収容所より恐ろしい甑山教化所	10
●黄長燁氏の発言	11
●ロバート・パク氏 その後	12



遅ればせながらボクも這い出す!

「北朝鮮強制収容所」の追求が
北朝鮮の**人権**人道侵害を動かす
『**鍵**』

日本が動く!? 世界が動く!

どこも、だれも、このまま放置してられないこと。

私たちの活動を支援して下さい。実際に「証言集」を読んで下さい。そして広げて下さい。彼らのいのちを見捨てないで下さい。

NEWS

★NO FENCE、全国国会議員へ「要望書と質問書」を提出! 2010.2.15

★来日後の黄氏に、北朝鮮派遣の暗殺計画。二容疑者韓国で逮捕、収監される。2010.4.20

★国家公安委員長、脱北者受け入れ条件緩和の「北朝鮮人権法の改正」に意欲。2010.4.24



◆数ヶ月前の記事だが、最終頁の「パク氏のその後」の記事と併せてお読みいただきたい掲載した。

< 北朝鮮のキリスト教信者たちは今 >

北朝鮮のキリスト教信者たちは今

国際キリスト教宣教団体「オープン・ドアーズ」によると、北朝鮮はキリスト教信者4~6万人を強制労働収容所に連行するなど、8年連続で世界最悪のキリスト教迫害国に選ばれた、と米国のキリスト教新聞『クリスチャン・ポスト』の電子版が6日、報じた(聯合ニュース1月7日報道)。

今年86歳になる女性は、色あせた聖書を毎日胸に抱いて寝ている。古い韓国語で書かれたこの聖書は、「朝鮮京城大英聖書公会」が発行した1936年版『鮮漢文貫珠新約全書』だ。

女性は99年に脱北し、今年で韓国生活12年目を迎える。18歳のとき以来60年以上も大事にしてきた聖書には、北朝鮮で経験したつらい年月やその痕跡の数々がにじんでいる。

93年に北朝鮮の社会安全部が女性の家を搜索した。捜査員らが来る前、女性は聖書を裏庭に掘ったキムチのかめを埋める穴に隠した。大雨が降った数日後に取り出した聖書は、雨にぬれてめくれ上がっていた。女性は破れた「創世記」のページを焼き、その灰を家族に分けて飲み込んだ。

59年、女性の家族はキリスト教を信仰していたことが見つかり、平壤から山奥に追放された。夫はそこで獄死した。別のキリスト教徒たちも同じような悲劇を味わった。処刑される者や、収容所に連行され山奥に追放される者もいた。

45年8月15日に日本の植民地支配から解放される前まで、北朝鮮には教会が2600カ所もあり、金剛山などの山には有名な寺も多く存在した。このうち平壤には、教会だけでも約270カ所あったという。平壤は「第2のエルサレム」と呼ばれるほど、キリスト教が盛んに普及していた都市だった。

だが、そうしたムードは共産主義政権樹立後、すっかり変わってしまった。教会や寺の多くも閉鎖され、牧師や僧侶たちは全員、農場労働者などになった。そうした中、北朝鮮の多くのキリスト教徒が南へ下り、設立したのがヨンラク教会・チュンヒョン教会などだ。

北朝鮮の宗教家たちは、金日成主席、金正日総書記と代々続いた弾圧にあいながらも、現在、北朝鮮には依然として「隠れキリシタン」が多く存在している。57年に平安北道竜川郡でイ・マンファ牧師ら36人が銃殺され、約130人が逮捕された。「宗教弾圧をする金日成主席を支持するな」と主張し、摘発されたのだ。66年には、同道博川郡でも同様の事件が起こった。山の洞くつで、キリスト教徒13人が5年間にわたり信仰生活を送っていたところを摘発され、処罰されたのだ。

北朝鮮憲法第68条には「公民は信仰の自由を持つ」という規定がある。平壤には、ポンス教会・チルゴル教会・カトリック聖堂・ロシア正教会などの教会があり、牧師を輩出する神学校や金日成総合大学宗教学科も存在する。仏教寺院も3カ所ある。

一見、宗教の自由が保障されているかのようだ。ところが、67年に金日成主席が「宗教は迷信」と発言して以来、多くの信者たちは処刑され、追放されている。

北朝鮮の宣教団体は、北朝鮮に存在する「隠れキリシタン」は約40万人に達すると見ている。

宣教団体は「片手に聖書、もう片方の手には食糧」を持ち、主に脱北者を対象に北朝鮮での宣教活動を行っている。韓国内のキリスト教団体も宣教用の「ビラ」を風船につけ、毎年北朝鮮に向け飛ばしている。礎石(コーナーストーン)宣教会では、特別に北朝鮮式の用語が使われている聖書を北朝鮮に送っている。

北朝鮮も、こうした地下活動的なクリスチャンが存在することを把握している。北朝鮮の国家安全保衛部は2008年12月、スパイを捕まえたことを発表する際の談話で、「宗教の仮面をかぶり、不純敵対分子を組織的に糾合しようとしていた秘密地下教会結成の陰謀を摘発した」と語り、北朝鮮に地下教会が存在することを明らかにした。

北朝鮮でキリスト教徒として捕らえられ、「スパイ」に仕立て上げられ、辛酸をなめる苦痛を余儀なくされる。収容所に連行され3年後に出所した34歳の男性が、韓国の宣教団体に送った手紙には次のように書かれている。

「一番つらかったのは、15日間腰を90度に曲げたまま立たされたことです。冬に服をすべて脱がされ、雪原をはって歩かされ、ひしゃくで冷たい水をかけられ、外に1時間立たされ、全身に凍傷を負いました。電気警棒でたたかれて気を失ったこともあります」

毎年「キリスト教迫害指数」を発表する国際キリスト教宣教団体「オープン・ドアーズ」は、北朝鮮をキリスト教迫害50カ国の1位に挙げている。

(紙巾の都合で、一部削除や編集しているところがあります。)

・四〇六万人が強制労働収容所送り
 ・8年連続で「最悪の迫害国」
 ・「隠れキリシタン」推定40万人
 ・一九四五年前は「第二のエルサレム」

Report

ファン・ジャンヨプ

黄長燁氏の講演

砂川昌順/NO FENCE共同代表

2010.4.6 Report

4月4日、元北朝鮮労働党書記の黄長燁氏が、米国訪問の後、韓国への帰路に來日した。4月6日の午後1時半から、同氏の講演会が政府関係者や北朝鮮問題に関わる民間団体等の関係者向けに開催された。日時や場所等は内密ということであったが、会場となったグランドアーク半蔵門というホテルの入口には、わたしがホテルに到着した午後1時頃には既に大勢のマスコミ関係者が待ち構えていた。

講演会は、出席者が限定されていたためか、混乱することもなく予定時刻に始まった。式次第は、以下のようになっていた。

- 13:30 開会
- 13:30~13:40 挨拶:中井大臣
- 13:40~14:40 講演:黄長燁
「金正日体制と今後の展望」
- 14:40~14:55 質疑・意見交換
- 14:55~15:00 閉会

中井大臣の挨拶の中で、招聘理由として、対北朝鮮、対拉致問題について有意義な機会が持てればとの思いがあり、北朝鮮問題解決に向けて、どのような方向でアプローチし解決していくべきかの参考に資したい旨の発言があった。

さて、肝心の黄長燁氏の講演は、2年前に出版された『金正日を告発する』(著者:久保田るり子 発行所:産経新聞出版)で語られている内容の一部と大差はなかった。この書籍をお読みいただければ、まさに黄長燁の語る朝鮮半島の実相が見えてくる。

今回の講演内容は、既にネット上でも公開されているため、ここでは簡潔にまとめてみたい。講演内容を敢えてカテゴライズすると、思想戦、経済戦、外交戦が必要であるということであった。概説すると以下ようになる。

北朝鮮問題の解決に向けて、以下が重要である。
 思想戦:主人である人民を目覚めさせ、徹底した民主主義(民主化)を推進していくことが重要。そのためにも民主主義(国家)の同盟を強化すべきであり、結束が強まれば北朝鮮には大きな脅威となる。
 経済戦:韓国と中国が自由貿易協定(FTA)を締結すれば北朝鮮には相当な圧力となる。



外交戦:日米韓が民主主義同盟を強化して北朝鮮に対して領土的野心のない中国を引き込み、中国式の改革開放を北朝鮮に導入させることで中国に安心感を与えることが、北朝鮮問題解決に繋がる。

これは、来日直前の訪米で同氏が行った講演内容とほぼ同じである。講演後、質疑応答の時間が設けられていて、以下の4名が質問を行った。

砂川(わたし):

黄長燁氏に対しては、昨年11月にお会いしていただいたことへの感謝と今回の来日に対するお礼を述べた。日韓両政府に対しては、期待を込めた要望として、国民や国際社会へアピールしていく狙いも含め、民間との連携において開かれた形での講演や招聘も考えていただきたいと申し上げた。

黄長燁:日韓両国の協力関係、民間団体同士の連携はさらに進めていかなければならない。協同してNGO団体を作り活動していくのが望ましい。

櫻井よしこ:

金正日の健康上の理由で、近いうちに北朝鮮に重大な変化が起きると思われているが?有事に際しての対処は?平和と安定に与える影響は?

黄長燁:南北統一の準備はできていない。改革開放へと進めなければならない。かつて北朝鮮では300万人もの人民が餓死したが、南には行かなかった。難民が溢れて南や日本へ行くようなことはない。急変はないだろうから懸念の必要はない。中国は、ただで支持はしない。中国式の改革開放を認めれば問題は解決する。

本間勝(拉致被害者の田口八重子さん兄):

拉致された人たちがどこにいるのか?そんなに長い間、重要な任務に就いているのか?重要な秘密の仕事させているから帰せないのか?

黄長燁:

どこにいるのか分からない。拉致された人々を救うためには、解放させた方がいいと思わせる必要がある。そう思わせるためにも、思想戦や経済戦を進めなければならない。

増元照明(家族会事務局長一増元るみ子さんの弟):

金正日政治軍事大学の存在は?軍によるクーデターの可能性は?

黄長燁:

大学は存在する。日本語教育を行っていることが聞いたことがある。軍人の生活は悲惨だが、今のところ、クーデターの可能性はない。頭のいい人は上のポストには就かせないから。

以上のような質疑応答があり、14:55頃に終演した。

人権に注目して活動を行っている民間団体の立場から、今回の講演で敢えて取り上げる内容があるとしたら、思想戦や外交戦を日韓でどう協力して押し進めていくかという点であろう。北朝鮮の民主化が進まない限り、テロルによる独裁体制下で人権侵害がなくなることはない。つまり、政治犯収容所が廃絶されることはない。

北朝鮮問題解決に向けた活動の一翼を担うNO FENCEの役割が、今後ますます重要となってくる。強制収容所の廃絶を訴えることと思戦や外交戦の展開とは、密接な協調関係があるからだ。

さて、今回の招聘は、同氏の生命身体の安全確保という理由から内密なものであったため、国民(民間団体)を対象とした講演会もなく、マスコミ対応も考えられていなかったこともあり、招聘の成果は極めて乏しいものであり、招聘の仕方を誤ったと言わざるをえない。一言で言えば、両政府ともにインテリジェンス・リテラシーの一面(現況の分析に基づく効果的な実行)が著しく欠如していると言える。

1923年生まれ、黄長燁の略歴は割愛するが、1997年に韓国に亡命した同氏から北朝鮮問題に資する情報を得たいとの願いがまさか日本政府にあったとは思われない。何ゆえに政府が同氏を招聘したのであろうか。民間による招聘、政府のバックアップという官民協同の取り組みのもとに国民や国際社会へのアピールの面で事前に綿密な打ち合わせを行っていたら、大きな成果が得られたはずだが、今回の来日は政府関係者の徒労だけの、成果のない残念な結果に終わったように思えてならない。

黄長燁氏は、講演の冒頭でこう言っている。北朝鮮問題は、徹底した民主主義の原則にのっとして解決すべきである。民主主義の立場から、北朝鮮の主人は人民である。その人民を抑圧し、死に至らしめている独裁者が主人ではなく、苦痛と不幸にある2300万人の人民が主人である。北朝鮮の主人である人民を救うためには、独裁者に期待してはいけない。取り引きしてはいけない。独裁者の話を鵜呑みにしてはいけない。直接対話は現実的ではなく、彼らのトリックやまやかさに騙されてはいけない。金正日と何かするのは炎と戦うのではなく、炎の影と戦うのと同じだ。

事を成すには、まず対象を見極め(正確に把握・分析してから)、行動しなければならないが、この基本的なインテリジェンス・リテラシーを、黄長燁氏は自然と習得しているのかもしれない。それに比べ、展望の見えない日韓両政府の姿勢は、基本から乖離した陽炎のようである。



※インテリジェンス・リテラシー:中西輝政(京都大学教授)氏の造語との説があり、「情報解析力または情報解読力と、情報の発信力または伝達力というものを合わせたもの」を意味する。(編集者)

【北朝鮮強制収容所の基礎知識】 <7>

先軍政治の意味

小川 晴久

今回のテーマは、なぜこれが強制収容所の基礎知識なのかと疑問をもたれるかもしれない。しかし、この知識なしには北朝鮮の強制収容所解体を賢明に押し進めていくことは難しいと考えるので、これを取り上げる。先軍政治を理解するのに依拠した本は『我が党の先軍政治』（朝鮮労働党中央委員会党歴史研究所執筆、朝鮮労働党出版社、平壤、2006年）原本である。私はこの本を一昨年北京に出張した折、北京の書店で見つけ、読むことになったのである。大事なことがいくつか分かったので、ご紹介し、基礎知識として共有したいと思う。

一、社会主義体制を軍事力で守る

先軍政治とは、字義的には軍を先に立てる政治と言う意味であるが、あらゆる分野で、あらゆる面でそれをするという凄みを持っている。それは「軍事重視、軍事先行の原則で、革命と建設において生ずるすべての問題」を見、且つ処理する政治である。私は本書を読むまでは、金正日が自分の体制を、否自分を必死に守るための最後の策だと理解

していたが、本書を読むと、自国のみならず、世界の社会主義体制を守る方式であり、1989年以後東欧・ソ連の社会主義が崩れた真因は軍事力の軽視であったという総括に基づき、これ以上社会主義体制を崩壊させないために、否社会主義を堅持し、発展させるために、金正日が創出した偉大な方式であるという。東欧・ソ連が崩れたのは、社会主義革命を実現するときだけ軍事力を重視し、以後体制を維持するのに一貫して軍事力を重視しなかったため、帝国主義勢力にしてやられ崩壊したと見る。ここから引き出された結論が、すべての面で軍事力を優先するという路線である。

二、「先軍後労」思想

読み進んでいくと、驚くべき命題が登場した。ソングンフロである。漢字を一切使っていないので、ソングンは先軍と分かるが、フロが分からない。しばらく読み進み、その説明が出てきて、後労（フロ）であることが分かった。軍隊を先にし、労働者階級を後にするというのである。労働者階級の指導性を絶えず堅持するというのが社会主義である。しかし、金正日は情報産業時代に入って労働が技術化、知能化、精神労働化の比重を強め、労働者階級の思想が弱体化しているを見て、それを根拠に、軍を社会主義体制を守る部隊として社会主義の全過程に位置づける、マルクスもレーニンも考えつかなかった新しい理論を編み出したというのである。

三、軍は党であり、国家であり、人民である

北朝鮮は1962年にすでに「全人民の武装化、全国土

の要塞化」を打ち出しているの、共和国の軍事化は金日成の時代のものであるが、金正日は東欧・ソ連崩壊後一層それを徹底したと見ることができる。それが軍は党であり、国家であり、人民であるという規定に示される。また「人民軍隊は偉大な將軍様を死を決して擁護防衛し、將軍様の路線と政策を死を賭して貫徹して、党の偉業、社会主義の偉業のために生命も躊躇せず捧げ闘争する革命 隊伍である」と。

金正日が追い詰められた自己の支配体制を軍事力を総動員して守ろうとするのは、金正日の立場に立てばわからないでもない。しかし、それを社会主義を守る新しい方式だと打ち出したとき、これからの社会主義は、党のみならず、国家も人民もすべて軍と化さなければ守れない社会主義となり、窒息するような社会となり、社会主義の魅力も一気に吹っ飛んでしまう。労働者階級を軽視するところに既に破綻が出ているが、明らかにこの理論は、社会主義理論としては失敗作である。人権の思想はひとかけらもない。

四、しかし、軽視してはならない

先軍政治が以上のような息苦しい窒息するような政治であり、理論的破綻しているからといって、軽視したり、馬鹿にしたりしてはいけぬ。なぜなら、それは体制を維持することが目的の先軍政治であるからである。本書には「苦難の行軍」と言う言葉が何度となく出る。1990年代の数年間金正日が最も追い詰められた時期を示すこの言葉は、非常に象徴的である。本書を読むとこの時期に先軍政治が形成され、確立されたのである。食糧危機で2百万とか3百万もの人が餓死したとされる時、金正日は米を買わずにその金で核を開発し、核保有国になったことが今にしてわかる。核武装をして自国を守る。強盛大国を2012年に完成させると目指してきた強盛大国の意味は核武装であったのである。今彼を取り巻く環境は「苦難の行軍」時代より良い。国際的に経済制裁を加えていることは確かであるが、中国が北朝鮮を経済的に支えている。中国が北朝鮮を進んで支えている理由は、北が崩壊したら困るという理由だけではない。先軍政治は全世界の社会主義を守るためであるという呼号を想起して欲しい。中国共産党首脳部、中国国家首脳部は先軍政治から学んで自国の軍事化を強めている。このように理解するとき、北の金正日の体制は簡単に崩壊しないことが分かる。金正日体制打倒を叫ぶことが有効であるとは私にはとても思えない。それを叫べば叫ぶほど先軍政治を正当化させることになるからである。先軍政治のアキレス腱は人権である。北朝鮮の現体制の最も弱いところは人権である。人権蹂躪の最たるところが強制収容所である。強制収容所に絞って、一貫してその解体を叫ぶ。別表現をすれば文通を認めよ、家族連座制を止めよ、を一貫して叫んでいく。北朝鮮の最もひどいところから改善を迫っていく。NO FENCEはそのために誕生した。先軍政治の正確な理解はなぜ中国が北朝鮮を支えているかの理解を正確にする。その不当性は北朝鮮の強制収容所に目をつむるところで共通している。中国首脳部にも人工衛星写真を突きつけよう。

※オガワハレヒサ 二松学舎大教授・東大名誉教授(東アジア思想史)



It's spring, fly and down!
To the inside in the camp.

丕闡堂(ひせんどう)
: 寺子屋のような所



photo by 渡邊裕馬(韓国2010.4)



収容所(航空衛星写真)

国会議員へのポスティングを通じて

渡邊裕馬

多くの人と同じように、私が北朝鮮の強制収容所に関心を持ったきっかけは姜哲煥・安赫両氏の共著『北朝鮮脱出 上・下』(文春文庫)を二年ほど前に通読したことである。その著書を読み、地球上に存在してはならない場所が北朝鮮に存在しているという事実を初めて認識した。情報が氾濫している現代の社会では、何が事実であるのかを正確に伝えることができる存在こそが必要とされているのではあるまいか。体験者の手記は又とない情報資料である。

それから大して時間も掛からずに、私は姜哲煥氏の体験談を直接聞く機会を得た。平成20年4月13日(日)のNO FENCE発足記念発表会の場を介してであった。ついで同年12月7日(日)の世界人権宣言60周年を記念した集会(東京国際会議)の場では、韓国語を通して申東赫氏と直接会話をすることができた。彼は私の拙い韓国語を寛容に汲み取ってくれた。

そして時は流れて本年2月6日(火)には、日本の第一線で活躍する政治家・国会議員の方々にNO FENCEの最新会報と申東赫の著書『収容所で生まれた僕は愛を知らない』(翻訳:李洋秀 出版社:KKベストセラーズ)(この本は一部の議員にしか配れなかったが)を同封した資料を国会の第一議院・第二議院・大三議院のそれぞれに配置してあるメールボックスに投函する作業を手伝った。NO FENCE会員僅か三名で二百余名の国会議員にポスティングをしてきたのである。

投函二日目の時点で二件の反応があったという所までは伝え聞いた。その返答が秘書によるものであったとも聞いた。私は本年2月22日(月)から韓国に留学しているため、その後の反応については未だ知らない。

ここで二点強調しておきたいことがある。一つは、人が一人いれば行動できるということである。特に私のような若い世代の人間には、このような運動参加の方法があるという一例を示すものである。物事が相互に関わり合っていることを知れば、韓国語の勉強も収容所体験者の手記を読むことも、共に北朝鮮の強制収容所を無くすため

にできる個人の努力の一つなのである。世代は関係なく日本人としてすべき行いであるが、言語習得は若い世代ほど容易であるため、ここにこのことを述べた。

もう一つは、知ることから全ては始まるが、関わり続けることに意義があるのだと私は信じる。凡そ物事はそれが重大な問題であるほど一朝一夕には成し遂げられない。だからこそ、より大勢の人間に正確な情報を広める必要がある。今回日本の国政を担う第一級の要人方に、北朝鮮の強制収容所に関する詳細な内部事情を綴った著書と日本国内におけるNGO(我々NO FENCE)の活動を知らせる冊子を託してきた。ここで俟たれているものは日本人の尊厳である。

最近のニュースでは昨年末のデノミの影響で北朝鮮の内部では餓死者が続出していると報道されているが、メディアの情報は正確さに欠けるように思われてならない。自ら動き行動しない人間ならば即座にそれらの情報を鵜呑みにするだけに止まってしまうだろう。しかし、収容所体験手記を読んだ人間ならば、真に北朝鮮の強制収容所を撤廃しようと願う人間ならば、その影響が収容所に何をもたらすのかをまず一番に考えなくてはならない。

そして実際問題自分は何をすべきか、また何ができるのかということまでに考えを巡らせるべきである。

本年2010年は日韓併合から百年が経過する年である。百年前の日本人が韓国人(特にキリスト教徒)に対してあたかも前述した収容所体験手記におけるような残虐非道な仕打ちをしてきたという事実をF・Aマッケンジーの著書『Korean Fight from Freedom』の邦訳版(韓哲曦 訳『義兵闘争から三一運動へ 朝鮮の自由のための闘い』太平出版社)を介して私は最近学んだ。今こそ全ての日本人が国を挙げて立ち上がるべき時がきたのではないかと私は思いたい。北朝鮮の強制収容所を撤廃することができれば、そしてその行動に日本人が惜しみのない努力を払うのならば、それ以上に尊いことなど無いだろう。その日が来ることを願って止まない。

(韓国成均館大学校留学中 NO FENCE会員)

「…だから」と「こそ」

共同代表

小沢木理

■判断とその理由

日本が、北朝鮮の問題を考える時に、日本は、ただの第三者的な立場ではいられないことは言うまでもありません。過去、朝鮮全土で日本が行った諸行為がいかに人道的に許されざることであったか、そしてその事実を、戦後日本政府は国民に充分知らせることがなかったこともまた事実です。さらに、今なお、植民地化された国の傷は癒えていないし、統治した日本はそういう当事者意識が希釈され風化されつつあることを危惧するのも、また事実でしょう。日本人の多くは、その歴史的事実を充分に認知し、前向きに背負っていくことが必要だと考えます。

そういう前提がある一方で、今北朝鮮は、外国人を巻き込みつつ、自国民への虐待(極めつけは強制収容所行き)を行っています。では一体、このことに日本はどういうスタンスを採るべきなのでしょう。

今迄、私たちは日本が採るべき態度を曖昧にしてきた嫌いがあります。北朝鮮に対して唯一言えるのは、自国民がさらわれたことに対しての、抗議や返還要求です。しかし、この問題にも、「日本の行った過去の拉致に比して文句を言えるのか(相手国への賠償が先)」の論調があり、1950年代から1984年にかけて行われた「帰還事業政策」(北朝鮮国家による大量の騙し連行行為事業)被害者である、日本から北朝鮮に渡った在日やその日本人配偶者やその家族にも、「自分で勝手に帰った人たちに、何ら日本は関与すべきでない」という論調もいまだにあります(実際の背景も知らずして)。そういう中、日本人の拉致問題は、自国民直接の問題として一定の国民の理解を得て、政府は当然のことながら取り組んできました。

しかし、それ以外の北朝鮮による人権侵害の問題には遠巻きにして過ぎてきました。それは、両国間にある微妙な関係を刺激したくないという政治的判断もあるでしょうが、それ以外に、“自信”がなかったのではないかと思います。

“自信がない”とは、相手の非を糺すことは、自分の過去の非の問題に油を注ぐことになるのではないかと恐れます。相手を糺す資格がない、否それ以上に、相手にもものを言っははいけないと自重、自戒を強いているのではないかと、そういう呪縛を解決できないのではないかと思えます。独立解放後の朝鮮半島に対し、日本のとってきた態度の曖昧さこそ問題があるという指摘は最もだし、日本は当然、その姿勢の是正と誠意ある行動を示すべきだと思います。しかし、そういう関係性のある中で、日本は北朝鮮当局による国民への残虐な行為や、不本意に他国から連行された人々への非人道的行為に、目をつぶり冷徹を通すべきなのかを考えてみます。



和田春樹氏は「国家社会主義国体制の北朝鮮においては民主主義も、言論の自由もなく、そして収容所というようなものがあることは皆承知している。ただ、そのようなことを、国交がない国の段階でそういうことを提起して問題にしていくということに実効性があるかが問題。そうでない場合にはこの共和国というものをつぶすということになってしまう。したがって国交樹立した暁にそのような努力が本格的に始められていくべきだ」と考えを述べています。(02年12月 第155回国会 安全保障委員会)

一方、1999年から北朝鮮で人道的な医療活動を1年半行い、最終的には国外追放されたドイツ人医師フォラチン氏は、「ドイツ国民として、発言せざるを得ない。ドイツは、歴史において、ナチの支配下にあったときには沈黙をしていた。そういうことから、発言しなければならぬという気持ちである。」「私は、ドイツ人であるということを強調しており、ドイツの歴史というところからも学ばなければならないということにいつも留意している。」と語り、また、「日本の政府とドイツの政府は、立場が似ていると思う。戦争の歴史から罪の意識がある、そういうことから強い立場がとれないという状況は似ていると思う。向こうもまじめに日本の主張を受けないという状況になっている。」(ドイツは、積極的にこれらの問題解決のための努力をし、その国際的立場を回復した。そのことに国際的評価を得ている。日本もできることである。／筆者介入)しかしその上で、氏自らの経験(自分の皮膚を提供して皮膚移植をしたことなど)からも、「いくらでも利用され続けるばかりであるから、毅然とした態度で臨むことが必要」という趣旨のことを述べています。

また、「唯一とり得るアプローチは、国際的な連立、連合体を形成して北朝鮮に対して、食糧や人権に関しての査察団を受け入れるようプレッシャーを与えていくべきだ。」「過去数十年間、北朝鮮の問題は、全く何も情報が出てこなかったことで、だれもその人権の問題、人権の悲劇が起きているということを知ることが出来なかったことが問題だった。しかし、今は状況が違う。その状況を把握している。」「子供たちは飢餓と死に苦しんでいる。全く外国人が入れない地域にある収容所に反国家的行為者は入れられている。日本国民もこのような強制収容所において拷問を受けているという情報がある」と述べました。

(赤矢印は、NO FENCEが加筆)

そして、「今皆様にも訴えたいことは、この子供たち、今飢餓に苦しんで、今死ぬところにいるわけでありまして、五十年後の朝鮮半島の統一などを待つ暇が、時間が彼らにはないんです。」と話しました。

これらは、8年前の、和田氏とフォラチェン氏の安全保障委員会での参考人発言の一部です。



北朝鮮は平壤以外は闇であり、照明の電気もほとんどないことが分かる。宇宙からみた地球夜景 (NASA)より 出典:『Wikipedia』

■各国の義務

「国際社会は北朝鮮人権問題に積極介入を！」
08年に米人権団体の「北朝鮮の人権に関する米国委員会」らがまとめた報告書「北朝鮮における国連安全保障理事会の行動への要請報告書」でそう訴えています。

この報告書の意図するところは、『各国家は、その国民を甚だしい人権侵害から「守る義務がある」とした基本原則のもと、北朝鮮における状況に対して国際法の新たな原則(すべての国家がその国民を重大な人権侵害から守るという責務)を適用することである。』とあります。

90年代に100万人もしくはそれ以上の自国民を餓死させ、その飢餓問題は慢性化し、北朝鮮の37パーセントの子どもたちが慢性的に栄養不良状態にあること。さらに北朝鮮は、現代の強制収容所ゲラークに現在220万人にもおよぶ人々を収監しており、過去30年の間に推測40万もの人々がこの収容所で死亡していることにも触れ、「北朝鮮政府は、次の2点において人道に対する罪に積極的に関与している。(1) 飢餓の原因となる食糧政策、および(2) 政治囚の処遇。」とあり、つまり、国家の人民への保護責任の不履行が、この報告書で要請している国際法の新たな原則(上記)を“適用する根拠”であるとしています。

この報告書は、ハヴェル大統領*、ボンデヴィック首相‡、ウィーゼル教授§が、北朝鮮の軍事的脅威により同国の人権問題があまりにも長い間、脇へ追いやられていたとして本報告書の作成をこの「北朝鮮の人権に関する米国委員会」ら人権団体に委託したものです。3氏は、『安全保障問題の取り組みを成功させる上で、人権問題で同国政府との敵対を避けるべきだというこれまでの意見が誤りであった。06年10月の核実験を受けて、北朝鮮内の人権・人道危機は安全保障の脅威と同列に扱われるべきであり、もはや国際社会での話し合いを抑圧するべきではない。』という考えを示しています。

さらに、『本報告書で述べる人権・人道侵害を北朝鮮当局は一様に否定するが、(中略)本報告書ならびに引用資料に記載された主張および内容に対して北朝鮮が否定あるいは取り消しを行うことができる唯一の真の方法は、国連職員、人権委員代表者、信頼できるNGOを招き入れて現場で証明し、これらの情報を無効とすることである。』とあり、至極明解です。

(*チェコ共和国前大統領、‡ノルウェー前首相、§86年ノーベル平和賞受賞者)

■国際社会の一員として

今、国際社会は国家による人民への人権人道侵害問題に強い関心を寄せています。とりわけ北朝鮮の強制収容所の存在を深く憂慮し、様々な人権保護団体が国連をはじめ各国に行動を促す働きかけをしています。

今迄にも様々な報告や証言、証拠が示されましたが、韓国政府は09年その集大成とも言える「北朝鮮人権実態調査研究領域報告書／北朝鮮政治犯収容所」を発表しました。近く英訳本が発行されるとい、その発行が世界から期待されています。

一方、日本の国会(安全保障委員会)で北朝鮮の収容所問題が取り上げられたのは、少なくとも前述の02年に、参考人として北朝鮮ドイツ人医師のノルベルト・フォラツェン(著書『北朝鮮を知りすぎた医者国境からの報告』)氏ら4名の発言があり、03年、今年2010年の2月と至近の3月に関連質問がありました。つまり、形の上では強制収容所の知識は共有されていたこととなります。06年「北朝鮮人権法」制定にも至り、最低限のルールが敷かれました。

しかし、その敷かれたルールがまだ有効に運用できているようには思えません。

国際社会の一員として成熟した日本のありかたを再度考える必要があると思います。

隣国で日常的に行われる“公開処刑”“強制収容所での残虐行為”これらの人類に対する犯罪行為を、「日本は…」と腕を組んで見て見ぬ振りして済ませようというのでしょうか。

北朝鮮人民の何より人権改善のために、そして諸問題解決のためには、現状を維持させている補給源の最残虐な強制収容所をなくすことがまず必要です。そのために、日本も国際的責任の一翼を担っていくべきだと思います。そのことが、過去の日本の犯した過ちの上塗りには、決してならないはず。それより、「知らない」「知ろうとしない」ことのほうが、「今は何もすべできない」と放置していることのほうがよほど非人道的です。理由無く一方的に死を強要され、殺されてゆく人々が今も、すぐ隣にいます。

小川晴久氏の「現代の世界にあって最も残酷で悲惨な所は、北朝鮮の山の中にある強制収容所であり、これを廃絶することは、現代に生きる者の最優先の義務ではないか」という思いを否定する理由は見いだせません。日本の良心が広がることを信じます。

北で耀徳収容所より恐ろしい甌山教化所

●この記事は2010年3月24日付け、朝鮮日報日本語版からの転載です。

最近、中国から強制送還された脱北女性に「墓場」と呼ばれている場所がある。
平安南道・甌山郡にある甌山強化所だ。
本来の名前は「教養所」だったが、2004年の刑法改正で「教化所」に変わった。

北朝鮮で刑法が改正される前、拘禁施設は4種類あった。
教化所、教養所、集結所、労働鍛錬隊だ。
教化所は3年以上、教養所は2年以下、集結所と労働鍛錬隊は1年未満の刑を受けた囚人が収監された。

甌山教化所が悪名を馳せるようになったのは、教養所から教化所に改名された後、「どれほど剛健な人間でも廃人になって帰ってくる」といううわさが広まってからだ。
甌山教化所が映画『パピヨン』の監獄のようになったのは、金正日(キム・ジョンイル)総書記の政策によるものだ。

金総書記は、「**社会の綱紀を乱す犯罪者に対し、1年で10年分の鍛錬をさせよ**」という命令を下した。
短い時間に過酷な労働を強いる甌山教化所は、人間の身体を急激に損ない、その結果として多数の死者が発生した。

記者が1987年に耀徳収容所から釈放された後、ある友人が暴行致死の疑いをかけられ、甌山に連行された。
2年後に帰ってきた友人は、骨と皮ばかりに痩せこけ、きちんと歩くこともできないほどの廃人になっていた。
その友人を見て、甌山は耀徳に劣らず恐ろしい場所だということを知った。

甌山教化所に脱北女性が連行されるようになったのは、1999年からのことだ。
90年代半ば以降、北朝鮮では餓死者が多数発生し、多くの脱北者が出た。大量脱北で体制崩壊の危機に直面した北朝鮮は、体制の整備に乗り出した。

対外支援を基盤に危機を乗り越えた後、中国に逃走した北朝鮮住民を中国公安と協力し、大々的に北朝鮮へ強制送還し始めた。
当時、はっきりした政治的疑いがない単純脱北の女性が、数多く甌山教化所に連行された。

政治犯収容所が飽和状態になったからだ。
北朝鮮は当時、甌山教化所内に、脱北女性だけを別に収監する特別区域を設けていた。
キム・ヨンスクさん(仮名)は中国から強制送還され、甌山教化所に1年間収監された。

キムさんは既に新義州の道保衛部で6カ月にわたり取り調べを受け、体調を損ねていた。
キムさんは「一緒に甌山に連行された17歳の少女は、保衛部の監獄で栄養失調にかかっていたが、そのまま甌山に連れて行かれ、その2カ月後に亡くなった」と語った。

キムさんは、監獄に到着した初日から、ブタも食べられないような水っぽい大根葉の粥を与えられ、1日12時間の労役を強いられた。
キムさんは「体重が50キロから30キロに落ちて、これ以上は動けないという限界まで至ったとき、幸いにも大赦令を受けて釈放された」と語った。

数百人の脱北女性のうち70%が栄養失調になり、毎日2～3人ずつ死んでいったが、遺体を納める棺はなく、ビニールで包み、共同埋葬地に埋めたという。
04年に甌山へ連行されたある脱北女性は、そのときのショックで今も苦しんでいる。

その女性は、「埋葬地に到着すると、犬が集まり遺体を掘り返して食べている姿に驚愕した」と語った。
人の手足があちこちに散らばっていたほか、人骨が積み上げられた光景に、一度埋葬地に行った囚人は、精神異常の症状を呈するという。

人民保安省出身の脱北者は、「甌山が全国的にうわさになったのは、囚人に課される短期的な過度の労働と栄養欠乏によって、政治犯収容所より死亡者が急増したからだ」と主張した。

政治犯収容所より軽い刑を受けて甌山に連行されるのなら、むしろ耀徳に3年間収容される方がましだ—と言われるほどに、人々は甌山教化所を恐れているという。
甌山教化所は10課に分かれており、一つの課は7から10の班で構成されている。

1班は通常40～50人程度で、囚人の中から丈夫そうな者を選んで班長に選出し、班長が保安員の指揮を受けて囚人を管理、監督している。

逃走者や監獄内で罪を犯した者に対しては、政治犯収容所とは異なり公開処刑は行わず、内部で処刑、あるいは監獄内の別の拘禁施設で特別な拷問を加え、死に至るまで加重な苦痛を与えるという方法で処罰するのが特徴だ。

姜哲煥(カン・チョルファン)記者

黄長燁(ファン・ジャンヨプ)氏の発言



「金正日の健康問題があっても、北朝鮮は短期間で崩壊しない」

黄長燁氏、訪日講演

出典: 東亜日報
2010.4.8

日本を訪れた黄長燁(ファン・ジャンヨプ)元北朝鮮労働党書記は、「北朝鮮が短期間で崩壊する可能性はない」と述べたと、共同通信が7日付で伝えた。

黄元書記は6日、東京で開かれた非公開の講演で、「北朝鮮は、故金日成(キム・イルソン)主席の影響が根深く残っており、金正日(キム・ジョンイル)総書記の健康に問題があるとしても、妹の金敬姫(キム・キョンヒ)労働党部長がいる限り、大きな混乱は起きないだろう」とし、このように述べた。黄元書記は、北朝鮮軍部も思想教育が行き届いており、反乱は考えにくいという見方を示した。

黄元書記は先月31日、米ワシントンで開かれた戦略国際問題研究所(CSIS)招請講演でも、現在の北朝鮮には金総書記に反対するほどの大きな勢力はなく、北朝鮮体制内部の分裂を期待することはできない。中国が支えている限り、ただちに北朝鮮内部に大きな変化が起きる可能性は低いと述べた。

黄元書記は4日午後、成田空港に到着し、日本政府は飛行機の出入口と通路にカーテンをつけ、外部から見えないようにセキュリティに注意を払っていた。6日の講演には、防衛省と内閣官房、警察庁、米国大使館の関係者、拉致被害者家族ら約70人が出席した。

複数のメディア情報を元に

黄長燁(ファン・ジャンヨプ)元北朝鮮労働党秘書(87)は、2010年4月4日から8日にかけて、ある種の厳戒態勢下極秘的に来日した。報道にも厳しい制限が。鳩山内閣の公安担当、拉致問題担当大臣中井治氏が、拉致問題で何らかを聞き出したいと招いたのが主な目的と見られる。

4月6日にセットされた同氏の講演会では、政府関係者や北朝鮮問題に関わる民間団体等の関係者だけに対象が縛られ、同氏の身の危機管理に万全を配し実施された。

日頃自由な生活を当たり前と思って暮らしている我々には、一種この対応が過剰に過ぎるとさえ感じられた。

しかし、黄氏は、金日正最大の暗殺標的人物なのだ。

この間もずっと狙われてきたが、つい最近の4月20日、脱北者を装った北朝鮮の工作員が、黄氏暗殺計画の容疑で逮捕され、収監された。容疑者は、「黄元秘書の暗殺に成功しても現場で投身自殺するつもりだった」と話したといい、実際に行ったが、今は公安当局の監視下にあるという。

北朝鮮が金正日体制に反抗的な脱北者に対する「掃討作戦を開始したのは、昨年11月ごろからとみられ、黄元書記暗殺グループが指令を受け、北朝鮮を出発したのもこの時期だそうだ。黄氏には、24時間、警備がついているのは、これで領ける。

自らを暗殺する使命を受けた北朝鮮工作員二人が逮捕された直後の21日、朝鮮日報記者/姜哲煥(カン・チョルファン)氏の単独インタビューに、黄氏は、「以前もこのような兆候はあったし、今後もあるだろう。まったく気にしていない」と述べた。身の安全を心配する側近たちに対し、最近によく「わたしはもう年老いたため、そんなことは気にならない。むしろ、わたしの存在によって北朝鮮の悪らつさを国民が理解できれば、それだけでいい」のようなことを口にするという。

その黄氏が言う、「金正日の非人道的正体を暴露するという大きな枠組みで臨むこと」と。さらに、哨戒艦「天安」の沈没事故については、「軍事的な対応は必要ない。すでに北朝鮮内でも金正日に反対する雰囲気が高まっている。いずれにせよ、金正日には全面戦争を行う度胸などない。そのため、このような形で挑発を続けているのであって、それに巻き込まれないようにしなければならない。この事件をきっかけに、われわれは国際社会と協力して名分を積み上げなければならない」とも話している。

黄氏への期待と可能性、はたまた限界とを私たちは抱きながら、しかし前に進まなければならない。ただ言えることは、黄氏は高齢であり、常に北朝鮮の暗殺標的の筆頭者であるということだ。今、黄氏を通して得られる情報や解釈とともに、他から得られる様々な情報を咀嚼し精査しながら、各国と連帯して進めていくことには変わりはないのであろう。

(まとめ:小沢)

ロバート・パク氏 その後



昨年(09年)の12月25日に、キム・ジョンイル独裁者の改心と北朝鮮解放を求める手紙を携帯し、北朝鮮の人権改善を求めて凍結した豆満江を徒歩で渡り、北朝鮮に入国した韓国系米国人の人権運動家ロバート・パク氏(前号参照)について、その後の情報である。

パク氏の無謀ともいえるしかし純真な信念の行動に、世界が固唾をのんだ。そしてその後のパク氏の行方を彼の行為を知る誰もが案じていた。

結局パク氏は、北朝鮮に43日間にわたり拘束された後2010年2月6日に釈放された。

パク氏は釈放直前、北朝鮮の朝鮮中央通信とのインタビューで、「北朝鮮は人権を守った。信仰の自由が保障された」※と答えている。そのパク氏の第一報のインタビューの内容が、あまりにも信じ難いものだったので、誰もが、キツネにつままれたような異様さを感じていた。

朝鮮中央通信が伝えた会見内容は、ロバート氏は西側の報道にだまされて北朝鮮に誤った認識を持っていたこと、北朝鮮には信教の自由があり、ロバート氏は北朝鮮のキリスト教徒とともに礼拝を行い、それを実感したこと、北朝鮮の軍人や人民はロバート氏に親切に接し、人権は常に保護されていたこと、今後は北朝鮮に対する誤った認識を正すために努力すると約束したことなどである。これに対し、北朝鮮関連の人権運動に取り組んできた市民団体「バックス・コリアナ」のチョ・ソンレ代表は、記者会見で、「(北朝鮮の報道が事実であれば)殉教したがっていた彼の信念が数日でなくなったことになる。人間は弱い存在だ。かなりの懐柔と脅迫があったに違いない」と語った。パク氏は北朝鮮入りする際、「北朝鮮の人権問題が解決するまでは絶対に戻らない」と語っていた。

解放された時の映像も様々な憶測を生んだ。聞くとところによると、当時、パク氏は、放心状態で一切誰とも口をきくこともなく、ただひたすら自宅にこもって、電話にも、マスコミの取材はおろか友人とも連絡を絶っているという。

3月に入ってメディアが報じたのは、「北朝鮮で性的な拷問を受け、その後遺症で2月27日からカリフォルニア州の精神病院に入院している。」というものだ。

パク氏の宗教指導者であるジョン・ベンソン牧師によれば、「(パク氏は)恐怖に直面したような不安症状を見せており、会話時にも呼吸が乱れるほど落ち着かない状況だ」と語った。ベンソン牧師はまた、「パク氏は北朝鮮に不法入国をした際に、国境地域でひどい殴打を受けたと話している」と語るものの、「心的外傷後ストレス障害(PTSD)による強い不安感のため、まともに話をすることができない」と北朝鮮で具体的にどのようなことがあったのかいまだに説明できていないという。

釈放後、パク氏は知人に対し、「平壤で口にはできないほどひどい性的拷問を受けた」と打ち明けていたという情報もある。

パク氏は、自分の退院したいという意志が認められて、精神病院を3月6日に退院している。

真相も、その後のことも分かっていない。(まとめ/MO)



留学先韓国の日没・撮影/渡邊裕馬



※インタビューで発表されたとする内容

(ロバート・パク ニュースより転載)

北朝鮮の国境を越えて逮捕されたロバートパクについて、北朝鮮は取り調べを行い、彼が、「北朝鮮へ間違った認識を持って侵入したが、自ら犯した行為を認めて深く反省したことを考慮し、寛大に許すことにした」と発表した。

インタビューでは、彼は、「西欧のおかしなうわさの影響を受け、罪を犯した」と語った。

「私は、西欧のおかしな宣伝の影響を受け、共和国に対する誤った認識を持つようになった。"北朝鮮の子供たち"や"ソウルトレイン"などのドキュメンタリービデオから、人権無視、虐待、大量虐殺などを知り、キリスト者としても耐え難い痛みを感じた。そのような間違った宣伝から、私は、共和国に対して偏見を抱くようになった。

その時はそれがなんであるかわからなかった。ただ、祈り、精進することが最初の反応だった。しかし、年々、ニュース国際メディアの報告が多くなり、悪い報告が増えていった。私も心がかき乱されるようになった。強制収容所にいる人たちのことを思い、そこでキリスト者が亡くなっていたら、餓えていたら、私も彼らと一緒に死ななければならぬ、彼らを助ければ、私は天国に行くが、そうしなければ地獄に行くだろう。そう思って共和国に入ることに決めた。

国境を越えるときには、兵士に銃殺されるか、収容所に収監されるものと思っていた。

しかし越えた時、兵士たちの侵入者に対する態度が私を変えた。兵士たちだけでなく、共和国で出会った人たちは、誰もが親切で、私の人権を守ってくれた。これほど優しい人たちは今まで見たことがない。信じられないくらい親切で優しい人たちで、わたしの健康についても、家族以上に気遣ってくれた。彼らの愛に感謝している。

また、聞かされていたことは全く違って、共和国に信教の自由が保障されていることを知った。弾圧があるだろうと思っていたので、ここでキリスト者として祈ることができるとは想像をしていなかった。そして私は自分が間違っていたことに気づいていた。全ての人が祈ることを特別なこととせず、妨げることもなかった。私は毎日望むだけ祈ることができた。驚いたことに、聖書を返してもらうこともできた。

ここでは宗教の自由が保障されていることを確信できた。この思いは、平壤にあるボンソ教会での礼拝に参加したときより強くなった。そこには、牧師がおり、聖歌隊があり、彼らは賛美歌を知り、神の言葉を知っていた。だから驚いたのだ。私は礼拝中泣き出し泣き続けた。PongsuKyohoe教会のような教会やキリスト者が、共和国の様々な地にあると聞いたからである。彼らは、礼拝し、祈り、自由に聖書やキリストの言葉を伝えている。共和国の人々は、読みたいものを読み、信じたいことを信じており、信教の自由が全ての人に完全に与えられている。

今まで私が見てきたもの、聞いてきたことは、間違っていた。私は西欧の間違った宣伝で間違いを犯したことを悔いている。共和国が全ての人民の人権を重んじ、自由と幸せで安定した生活を保障していることを知った以上、同じような間違いを犯さないことを誓う。

私は今、人権を尊重する地にいる。人権を尊重するだけでなく、彼らは、私を本当に愛し、人権以上のことを示してくれた。彼らは私に優しさを示してくれた。私は軽率な行為を悔やみ、共和国の実際を誤って見ており、間違ったことを犯したことに許しを請いたい。ここで学んだこと、見たこと、考えたこと、人々から受けた親切な行為から、共和国の実態を知り、12月25日に行ったことを悔い、申し訳なく思い、このようなことは2度と行わない。

共和国に対して行った罪のあがないのため、共和国に対しての偏見をただすあらゆる努力を行うつもりである。

できるだけ早く朝鮮半島が統一され、和平が実現されるようにと、キリスト者として誠実に祈っている。

(英訳・原沢あゆみ)

<http://robertparknews.com/index.html>